金井中だより

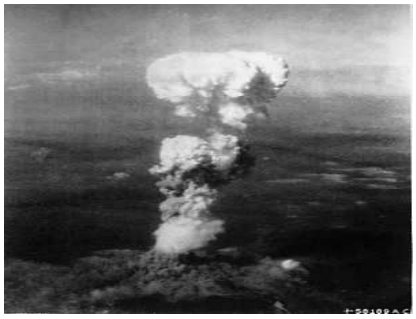
令和４年１２月２３日

第８号

校長　仙北屋正樹

ｸﾘｽﾏｽの言い方	英　語	Christmas（ｸﾘｽﾏｽ）	空の言い方	Sky（ｽｶｲ）
	スペイン語	Navidad（ﾅﾋﾞﾀﾞｯ（ﾄﾞ））		Cielo（ｼｴﾛ）

二度と原爆の悲劇を起こさせてはいけない！



今年の漢字は「戦」に決まったというニュースが、先日新聞などで発表されました。この漢字の意味には、ワールドカップなどで戦って素晴らしい成果を収めたよいう意味も含まれてはいますが、やはり「戦」のイメージは「ウクライナ」の意味が大きいと感じてしまいます。きっとみなさんも同じではないでしょうか。２月から始まった「ウクライナ侵攻」はついに年を越しても収まらない状況です。いったい何人の人々の命が失われたのでしょうか。ウクライナの人々だけはなく、むりやり戦争に行かされたロシアの人々もたくさんいます。つまり、罪もない人の命がたくさん失われたのです。かつて、日本でも同じようなことがあったことを、みなさんも知っていると思います。その時使われた最大の武器が「原爆」でした。このことを忘れないために、その体験を話してくれる方を、ずっと探していました。そして、ついにその方を学校にお招きすることができました。

　１２月１６日（金）の５時間目に１・２年生、６時間目に３年生を対象に、原爆の恐ろしさを語ってもらう会が開かれました。当日講師として町田市原爆被害者の会（町友会）の竹中清史さんと興田　茂さんのお招きしました。このお二人は、町田市で原爆の悲惨さを伝えたいという思いで活動されている方々です。話に入る前に、興田さんがご自分で作られた原爆によって破壊された広島中心部の惨状をまとめた地図を紹介してくれました。この地図には、原爆が落ちた時の人々の様子が細かく書いてあります。校長室前の掲示板に貼っておきますので見て下さい。続いて、「折り鶴の少女」の呼び名で有名になった、佐々木禎子さんの生涯が紹介されました。

　原爆が落ちた時、禎子さんは２才７ヶ月。その時、禎子さんは爆風で３ｍ以上飛ばされたどうです。幸いにもケガもせず大丈夫でした。家はぼろぼろになったために外へ逃げたのですが、その時に「黒い雨」を浴びました。この黒い雨とは、放射能をたくさん含んだ雨で、それを浴びた人々がたくさん命を失った原因となったものでした。小学校時代は元気に過ごしていたようですが、小学６年生の時、ついに身体の調子が悪くなりました。病名は原爆が原因と思われる白血病でした。その時点で、残りの命は３ヶ月と言われました。その後苦しい病院での生活が続きますが、禎子さんは周囲に迷惑をかけないように明るく過ごしていたそうです。そして１９５５年１０月２５日、１２才９ヶ月という短い生涯を閉じたのです。原爆が落ちなければ、もっと生きられたはずです。広島の原爆記念館に行くと、禎子さんのモニュメントがあるそうです。

　続いて、竹中さんの原爆体験のお話がありました。一部にはなりますがご紹介します。「１９４５年８月１５日、時は８時１５分です。朝食が終わり、皆でふとんを片付け始めた時でした。私はふとんを２階に持っていくために、階段の下まで来た時のでした。周囲が突然ものすごくパッと明るくなり、フラッシュライトが何十倍も一度にたかれたような光が輝きました。ほんのわずかな時間差！。もし私が２階にいたら、そのあとのものすごい爆風で飛ばされ、あの世に言っていたことでしょう。私は大声で「お日さんが落ちた」と母のところに駆け込み抱きつきました。母は出産後６日目で、洗面所で髪をといていた時のことでした。そのあと数秒後、ものすごい爆風が北西方面から吹いて

きて、子どもたち３人は母の周りに抱きつきました。のちに広島では、この原爆のことを「ピカドン」と呼んでいました。ピカッと光って、そのあとしばらくして「ドン」と来たからです。大人たちは、何かとんでもないことが起こったと察し、子どもたちに大声で「防空壕に入るように」と叫びました。防空壕に入る前に、生まれたての赤ちゃんせをと、みんなで赤ちゃんの寝ているところに行ったのですが、ベッドには見当たりまんせん。部屋の隅にベッドは見つかったのですが、赤ちゃんはいません。その時、部屋のふすまがスローモーションのように倒れてきたのを覚えています。みんなで倒れてきたふすまを一枚一枚取り除き、懸命に赤ちゃんを探していると、ベッドとまったく反対方向すのの５ｍ先まで全員で防空壕に入りました。３時間ぐらいして音もなくなったので、全員がおそるおそる外へでるとびっくり。庭にはガラスが割れ、セトモノが飛び散り、おもちゃが散乱して歩けるものではありません。庭から遠くの家が焼けているのがみえ、空には大きな入道雲がすごい速さでわきおこっていました。きのこ雲を下から見たことになります。さいわいこちらには、黒い雨は降りませんでした。その後、外へ出てみるともすごい光景に出会いました。この世とは思えない地獄の絵巻物が展開されていたのです。道路には、はき物もはかず、顔は真っ黒、服は破れ、全身やけどして男女の区別もつかない人が続いています。でも、ここまで歩いてこられただけ元気なのです。何人かは歩くことができず、うずくまったり、また、たまらず川に飛び込む人もいました。飛ぶ込んだ人は誰も上がってきません。川で死んでいくのです。」これが、竹中さんが経験した原爆の落ちた日の様子です。最後に竹中さんは、みなさんにこのようなメッセージを伝えていました。「我々にとって大切なことは、原爆投下はそのすごさにおいて、ほかに比べようもない地獄の惨禍をもたらしたことを、決して忘れてはならないのです。悲惨と残酷のみを残して亡くなっていった多くの先輩たちの思いを、改めて思い起こし、若い世代にこの悲劇を伝え残すことが、残された我々の重要な使命だと思っています。そして、この世から再び悲劇を繰り返すことがないように、核兵器の廃絶を声を大にして、その実現に勧めていかなければなりません。核戦争は勝者も敗者もありません。人類の破滅のみが残るのです。ノーモアヒロシマ、ノーモア核兵器、安らかに眠って下さい。過ちは繰り返しませんから。」

長い文章になってしまいましたが、竹中さんの思いを伝えるには必要な量でした。「ウクライナ侵攻」だけではありません。今、日本の近辺でも危険なことは起こっています。核兵器を使うぞと、脅しているようなニュースも聞こえてきます。このような時代だからこそ、竹中さん、興田さんを始めとする町田市原爆被爆者の会のみなさんは、ご高齢にも関わらず、講演を開いてくれているのです。これからの未来を生きている生徒のみなさん、今回の講演を忘れずに、戦争のない世界を築いていって下さい。

１年生が指文字に挑戦！

夏休みに１年生の数名が、町田市とＮＨＫが企画した「共生社会を目指して」という題で、聴覚障がいについてのドラマを題材として「ろう者」の方との関わりについてのトークイベントに参加したことをお伝えしました。それをきっかけとして１年生が、手話よりも覚えやすい指文字に挑戦する学習を行いました。講師の先生は、以前に聴覚障がいの子どもたちに勉強を教える学校に勤めていた、松沼先生が指導してくれました。指文字とは、五十音をいろいろな指の形で示す文字で、それを組み合わせれば自分の意思を伝えることができるものです。授業では、松沼先生が指文字の基本を教え、それを使って自分の名前を生徒のみなさんが指文字で伝える練習を行いました。最初は難しそうでしたが、覚えるとかなりうまくできるようになっていました。そして、松沼先生が問題文を出して、それを生徒のみなさんが指文字で示したり、逆に先生が指文字を見せて、生徒のみなさんがそれを読み取るということを行いました。短い時間でしたが、けっこうできる人が多くいたようです。ぜひ、みなさんにも指文字をを紹介したいと思っています。次号以降に指文字についての記事を掲載したいと思っています。ご期待下さい。

今月の表彰

まちだ納税貯蓄組合連合会優秀賞（税の作文）	Ｍ・Ｍ（３年）
まちだ関税会特別賞（税の標語）	Ｍ・Ｋ（１年）
バドミントン冬季大会町田予選シングルス第３位	Ｔ・Ｎ（１年）
バドミントン冬季大会町田予選ダブルス第３位	Ｍ・Ｈ、Ｓ・Ａ（１年）